

陳舜臣さんを語る会通信

NO.95 Jan. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2023年1月1日

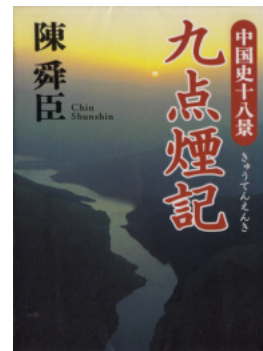
<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

歴史エッセイ集『九点煙記 中国史十八景』

本号では、歴史エッセイ『九点煙記 中国史十八景』（1980 講談社）を紹介します。初出は講談社の読書誌『本』1979年1月号～80年8月号です。連載のとんだ号が2度あるようです。陳舜臣さんも、中国旅行など多忙だったのでしょう。右の画像は、たちばな出版発行（2006）の表紙。

連載前年の1978年夏、南昌から景德鎮へ、「中国やきもの紀行 景德鎮」取材旅行
連載中の79年3月、長沙、桂林、南寧、桂平ほか「太平天国」取材旅行
同年9月、西安ほかNHK「シルクロード」取材旅行（「シルク…」取材は1977年にも）
同年10月、トルファン、クチャ、大龍池、カシュガルほか「天竺への道」取材旅行
同じく連載中の80年4月には福建省各地、揚州（鑑真和上像里帰り）、四川省各地、更に洛陽、龍門へ。5月、泰山へ

陳舜臣さんの中国熱が最高潮といった時期の執筆です。（編集委員 橘雄三）



題	内 容 (I)
煙のゆくえ	題名は、「夢天」と題した李賀の詩の一句「遙望すれば齊州は九点の煙」からとったもの。天上から見おろすと、中国全域は九つのおぼろなモヤにすぎないということです。後半、アヘンに言及している箇所が興味深い
ちょうこうしょうこう 朝衡小考	朝衡とは阿倍仲麻呂（698-770）の唐名。716年、満15歳で遣唐留学生にえられ、翌年入唐。博学宏才、玄宗皇帝に寵遇され、また海難に帰国をはばまれて在唐五十余年、唐の長安で没。「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の歌は有名
らりょうおう 蘭陵王	蘭陵王は6世紀後半、中国南北朝末期の北齊の皇族、本名は高長恭。武勇にすぐれた人物であったが、その容貌が柔和で婦人のようであった。そのため、合戦に際し、出陣の時、グロテスクな仮面をかぶったと伝えられている。日本の雅楽にも伝えられている蘭陵王の故事である
遺臣	鄭思肖（1241-1318）、宋末・元初の人。元に滅ばされた南宋の遺臣をもって自任。大阪市立美術館のコレクションのなかに彼の「墨蘭図」がある。この絵の蘭には根も根を張る土もなく、亡国の憂憤を託したとされている

「煙のゆくえ」補足

陳舜臣さんは、十九世紀になって、煙に新しい、だがいまわしい意味が加わった。それはアヘンである。

とし、いくつかのエピソードを挟む。まず、吳昌碩（ごしょうせき）

清末の画人吳昌碩は、日本におおぜいのファンをもっていて、なんども日本に招かれたが、ついに訪日は実現しなかった。日本に行けば法律がきびしく、アヘンを吸うと牢屋にいられる。

そうきいたので、吳昌碩は二の足を踏んだという。

次は朱徳。

新中国の元勳の一人であった朱徳も、中年のころまでアヘンをのんでいたと告白している。彼が中年になってからヨーロッパ留学を思い立った理由の一つは、アヘン常用の悪習を脱却して、人間として立ち直るためであった。

アヘン吸飲は中国の著名人にとつて、身近なところにあつた。本通信でも、No 60の3頁で曾國藩のアヘン吸飲について取り上げている。

「遺臣」補足

大阪市立美術館のコレクションに鄭思肖の「墨蘭図」がある。この絵の蘭には根も根を張る土もなく、亡国の憂憤を託したとされている。

ー どうしてこの蘭は土から生えていないのですか？
作品をみた人がそうきくと、作者はいつもおなじことばで答えた。

ー 土地は蕃人が奪い去った。おまえは知らないのか？

作者の名は鄭思肖である。美術館の目録には、時代を「元」としている。だが、作者の鄭思肖は元に滅ばされた南宋の遺臣をもって自任していたのである。



「墨蘭図」 www.sumitomo.gr.jpより

『九点煙記』 内容及び補足(2)

題	内 容 (2)
異色	馮道(ひょうどう 882-954)は、後唐、後晋、遼(契丹)、後漢、後周の五朝八姓十一君に仕えた異色の人物である。そのため、無節操人間の代表のように評された。そしてこれ又、明末の異色の思想家李卓吾(1527-1602)は『蔵書』のなかで、馮道を弁護した。陳舜臣さんは、『中国傑物伝』でも馮道を傑物十六人の一人として取り上げている。そこでも、李卓吾の『蔵書』に言及する
方士のふるさと	秦の始皇帝の命で東海の三神山に不死の仙薬を求めた徐福の話はよく知られている。徐福は陳作品のあちこちに顔を出す、陳さんにとって自家薬籠中のもの。続いて、李少君、少翁、欒大など漢の武帝時代の方士に言及、あと、『後漢書』『方術列伝』に取り上げられた三十四人の方士の戸籍調べをしている。■陳さんは、「焚書阬儒」というが、穴埋めにされたのは方士が多かったとする
ごとべいどう 五斗米道	五斗米道は道教の一種で、創始者は後漢の張陵といわれている。江蘇の人だが蜀の地に入り半仙半医の術を習得、病気をなおした謝礼に米五斗(現在の日本の一升より少し多い)を受取った。張陵の子・張衡がその術を受けつぎ、孫・張魯の代になって、飛躍的に発展をとげた。『曹操 魏の曹一族』では、張衡の未亡人を少容という名で登場させ、教団を率いる美しく魅力的な女性として描いている
敬神の日々	林則徐が湖広総督として武昌にいた1838年の日記から、規則正しく文廟(孔子を祀る)、武廟(関羽を祀る)ほかに詣でる彼の敬神の日々をたどっている。ちなみに、1838年は、アヘン問題解決について彼の提出した奏文が皇帝の目にとまり、欽差大臣として広東へ派遣されることになった年である
かいみんしょうこう 回民小考	イスラム教は中国西北地方では、ウイグル(回紇)族を通じて中国に伝播したので回教と呼ばれるようになった。イスラム教徒は、歴史上は回回、回民と呼ばれるが、自らは穆斯林(ムスリム)と称する。回族とは新しい呼称である。■永楽帝に仕え、大海軍を率いて七たび海外に使いした宦官鄭和についての記述が詳しい
げんごうだんぎ 元号談義	元号の誕生は漢の武帝の時代で、その第一号には元狩説と元鼎説とがあるという。前者は一角獣の捕獲、後者は川のほとりで鼎を得たといういずれも瑞兆により建てられた元号である。ところで、元号には、これらの例のように事実に基づいたものと、日本の明治、大正、昭和、中国の咸豊、同治、光緒のように理想をあらわしたものがある、尚文の気風の強い中国にあって文のつく元号が少なく、逆に尚武の国とされる日本に多い、一君主一元号制は明の洪武帝に始まるなどなど、陳さんの蘊蓄が語られる
中山王	中国河北省の省都石家荘市のやや西北にあたるところで、古墓、古城址が発見された。戦国時代の中山国の王陵、都城であることが判明。陳さんは、『史記』に「中山世家」という項目は無いが、ほかの世家の関連記事に出てくるからその程度の中型国家であろうと推論する。そして、中原国家は一字名を、夷狄の国は二字名を用いるならわしの時代にあつて、「中山」という二字名に注目する
すいこがいごうこう 水滸外号考	水滸伝に登場する百八人の豪傑にはそれぞれニックネーム、すなわち「外号」がついている。この「外号」を調べ考えてみるという内容である。まず虎、次ぎに竜。ところで、百八人の豪傑については、『陳舜臣さんを語る会通信』No.56で詳述



鄭和は明帝国が成立して三年がたった一三七一(洪武四年)年に雲南行省の昆陽の風光明媚な農村にイスラム教徒(「色目人」)の移住民の子として生まれた。現在、彼の生地とされる月山というなだらかな山を背後にし、滇池を北に望む昆明市普寧県昆陽鎮には、鄭和記念館が設けられている。こうした静かな内陸部の農村に生まれた鄭和が、時代の激動の中で中央の官界へ、海の世界へと押しやられ、思いもかけない人

「回民小考」補足

生の軌跡を描いていくことになるのである。(宮崎正勝著『鄭和の南海大遠征』中公新書)



右文中の鄭和記念館については適切な画像が見あたらないので、同じくふるさと昆陽にある鄭和公園の画像を上に掲載しました。ここには、鄭和の父、馬哈只(マハジ)の墓がある。
(tech.sina.com.cnより)
なお、鄭和の墓(右の画像)は南京にあります。
(www.aflo.com/jaより)

『九点煙記』内容 及び補足(3)

題	内 容 (3)
鑑真と桂林	鑑真は、日本への渡航を決意してから12年目、6度目のチャレンジでやっと来日(753年)。最も惨憺たる失敗は第五次のそれで、洋上漂流し、海南島に流れ着く。そして再起に向け、いったん揚州に戻る決断をします。これとて多難な道でした。その上、栄叡の死、自身の視力の衰えが加わります
西安便り	陳さんは、1977年、「シルクロード」取材のために訪れた西安のホテルの一室でこの原稿を書きました。前日に見学した唐高宗と武則天の合葬墓乾陵(けんりょう)についての記述が多い
故城	1973年、79年の新疆ウイグル自治区への旅行を踏まえ、唐太宗の時代に滅ぼされた高昌故城、元末に放棄された交河故城ほか、見聞・思索を語る。蘇巴什(スパシ)故城での特記すべきこと■古墓の陶棺から発見された遺体の頭蓋骨が平たかったという話を聞き、陳さんは、玄奘の『大唐西域記』の記述を想起、驚く

「鑑真と桂林」補足

空海は八〇四年、遣唐使節の一員(留学生)として中国に向かいますが、福州に漂着、閩江を遡り、船を下り山を越え、やっと予定のルートに辿りつきます。これは、どんなコースであったのでしょうか。

七四八年、鑑真の日本を目指した五回目のチャレンジは最も惨憺たる失敗におわり、海南島に辿り着きます。このあと、どのようにして揚州へ戻り着いたのでしょうか。

空海と鑑真のこの二つのできごとは、どちらも、陳舜臣さんの著作に記述があります。

前者は『曼陀羅の人』がそれです。これは、本通信No21で詳述しています。ここでは、後者について見ていきます。「鑑真と桂林」からの引用です。

揚州に戻るにも、二つのコースがあった。

珠江口に流れこむ珠江は、広州市の西の三水あたりで、西江と北江とを合わせる。西江はその上流が桂江で、それは湘江につながり、洞庭湖を経て長江に結ばれている。西江をさかのぼって長江にはいり、流れに乗って揚州に戻るのが第一のコースであった。

北江をさかのぼれば、広東省北部の韶關市を経て江西省にはいり、贛江に乗って洪州(現在の南昌市)、鄱陽湖を経て長江にはいる。北方から広東へ赴

任する高官たちが通ったのは、たいていこの第二のコースだったのである。

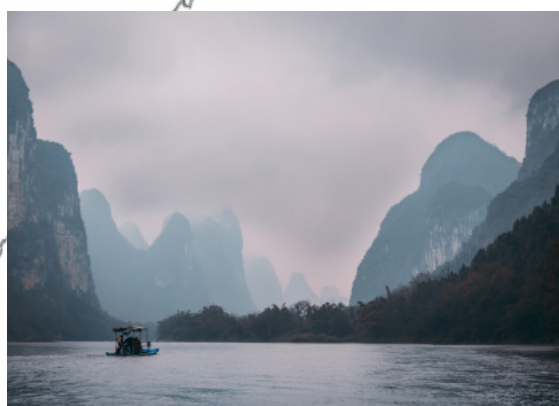
最初、鑑真一行は第一のコースをとっていたが、桂林まで来て、広州に引き返し、第二のコースをとることに。この辺りの事情は本文をお読み下さい。

鑑真和上一行は、ここで灘江りをしたのである。鑑真和上はこのころ、おそらくすでに両眼の視力が衰えていたであろう。それでも、彼は食い入るよ

うに、灘江の奇観を眺めたにちがいない。

鑑真に随行した日本僧の栄叡が死んだのは、桂林から広州へ行く途中のことである。

この箇所の理解には、
海野昇雄訳『唐大和上東征伝―
鑑真和尚東渡記 日本語中国語
現代語訳―』が便利です



地名は基本的に現在の名称です。
「鑑真と桂林」本文で確認して下さい。
地図は編集委員作成。

『九点煙記』内容及び補足(4)

題	内 容 (4)
れんだん 聯談	中国では陰暦の正月を「春節」と称して祝う。春節には家々の門の左右の柱に赤い紙に書いた対聯が貼られる。そこにいろいろとめでたいことが書かれる。この習慣は、いまでもすたれてしまったわけではない。日本にこの習慣はない。題名の「聯談」は、この対聯談義である
きんでんしょう 金田抄	1979年3月、陳さんは『太平天国』の取材旅行で、洪秀全挙兵の地、広西壮族自治区桂平県金田村を訪れました。その時の見聞思索です。『太平天国』については本通信No.4及び6をご覧ください
李季さん	李季さんの訃報から話は始まる。李季さんは著名な詩人で、何度も会った1979年当時は作家協会副主席であり、人民文学出版社社長でもあった。李季さんの作品は、民衆と肌をふれ合うようにして働いた経験から生まれた

私の桂平行及び「金田抄」抜粋転載

【広州―梧州―桂平 二泊三日の船旅】

陳舜臣さんの太平天国取材旅行は一九七九年のことだ。そして、その十三年後、私(橋)も同じ所へ行った。しかし、現地までの行程は全く違っていた。

陳さんは、列車で、広西壮族自治区の省都南寧まで行き、南寧から、高級国産車「上海」で、太平天国挙兵地、桂平を目指している。

私は中国人の友人・王さんとともに、広州から、途中、梧州で乗り換え、桂平まで二泊三日の船旅をした。

二日目早暁、まだ薄暗い、土砂降りの雨のなか、私たちの船に小舟が横づけになり、客の乗降があった(右の写真)。左の写真は桂平の港。冬で川の水位が低く、船を下り、待合所までずいぶん階段を上る。



【紫荊山は宝の山】

― いまでも紫荊山は宝の山です。と、案内の人が説明した。

貧窮の土地のどん底の人たちが、世直しに起ちあがったという先入主が、私の頭にあったが、この土地はけっして瘦せてはいなかったのだ。

どん底生活に慣れた人は、世直しを考える意識は低いであろう。貧しいけれども、これまでなんとかやって行けた人たちが、どん底生活に落ちる。― 彼らこそ革命の核心となる階層ではあるまいか。

私は緑ゆたかな金田村の風景を、管盤から見おろし、また宝庫といわれる紫荊山にはいつて、太平天国の時代をしのび、そんなことを考えた。

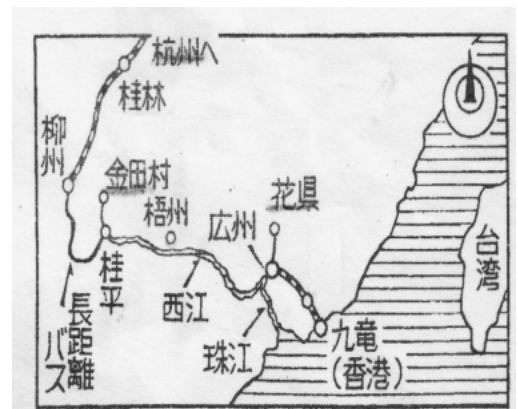
■紫荊山 洪秀全たちが挙兵前に同志をあつめ、キリスト教を布教したところ。

【硬直した教条主義史観】

林彪、四人組時代には、歴史上の人物の評価について、教条主義的な枠が岩乗につくられていた。

硬直した教条主義史観によれば、洪秀全、楊秀清、陳玉成は、一点の曇りもないシロであり、韋昌輝、石達開、李秀成は裏切り者、敵のまわし者、反革命、分裂主義者として、一片の弁解の余地もないクロとされた。

牽強附会の教条主義史観が猖獗していたころ、狂犬に咬まれることをおそれて、作家たちは太平天国をタブーとしていたのである。四人組の没落によって、タブー



がのぞかれ、作家たちは一斉にこのテーマに取組むことになった。
私は自分の小説のなかでの、石達開のポジションをまだきめかねている。

【唯一現存する三界廟】

清朝にとって太平天国は大逆徒であったので、その記念になるようなものは一切破壊した。ただ挙兵にさいして、洪秀全が指揮所にしたことがあるといわれている金田村の三界祖廟だけは残っている。

下は金田村の三界廟
(この頁、画像は全て
編集委員の撮影)

